世田谷村日記

石山修武

三月十八日

今日は一日休養日である。スケッチしたり散歩したりでのんびりしよう。朝、これ又鈴木先生から書けよ、書くんだぞのプレッシャーとして渡された彰国社への藤森照信の原稿を読む。ウォートルスの出自行末に関するものだ。面白い。藤森探偵が最近つとに世界に出没しているらしいのは知っていた。が、まさかロッキー山脈の奥深い鉱山まで足をのばしていたとは驚いた。歴史家とは面白い人達である。鈴木先生はシシリアのパレルモまでジョサイヤ・コンドルを追ってゆく。たまたま私もその道中に立会えた。藤森探偵はウォートルスを追いロッキー山脈へ。重源論を書き切れなかったのはこの破天荒な行動力が私に薄かったからだろう。畜生。好奇心が全ての才能の素であるならばチョッと問題だな俺は。

鈴木博之と藤森照信。シシリアとロッキー山脈。これは何か書けそうである。面白いナア。私が書くように求められているのは「闘う」である。藤森は「探る」。でロッキー山脈まで探った。私はこの二人の歴史家と闘うというのを書くか。品良く書ければ面白くなりそうだ。施主と闘ったり、状況と闘ったりはすでに俗だ。歴史家と闘うのが高嶺の百合だな、ヨシ。

昼前学校へ。昼食はごぼう天うどんとカツ丼。喰い過ぎて眠くなり。午睡。松崎町倉スケッチ。宮本邸チェック。藤井邸スケッチ。建築を考えるのは楽だ。これは馬鹿向きの仕事なんだろうか。十六時過広島市の塚田さん来校。ひろしまハウスの打合わせ。グライター氏来校再会を喜ぶ。グライター塚田氏と夕食。グライターの明日のレクチャーは楽しみである。前回の東京レクチャーの続きをやるのだと言う。遺跡の問題は重要である。彼の日本文化批判に耳を傾けたい。九時学校へ戻る。安藤向井のＷＯＲＫみる。十時ホテルへ帰る。一人で歩く夜道が気持良かった。夜の庭園の只中を歩く心地良さの素は何だろう。秘密の庭園、トムは真夜中に庭で、等に代表されるイギリス庭園文学の素は何かを考える事でもあるだろう。日本には庭園文学のようなジャンルはあるのか。中国の漢詩や文学には庭園、廃園が詠嘆される事が少ないように思うが、グライターの言うメランコリーとの関連は。

三月十九日

昨夜は良く眠れなかった。眠るのにもエネルギーが必要なのだな。八時ロビー。グライター氏と食事。今日から少し独人で動こう。

グライター氏のレクチャーは前回東京での遺跡論を踏まえて、それを更に発展させたもの。流石である。ワールドトレードセンターの崩壊はアメリカに歴史的に初めて遺跡が出現した意味があるという指摘が新鮮であった。モダニズムによって封印されていた建築の諸々のイメージがＷＴＣの廃虚によって露出することになる。封印されたものとは例えばコキ族のスネークダンスに代表されるような神話的なものなのだ。ヨーロッパは日常的な廃墟の存在によって今と神話的世界との距離がそれ程遠くはないが、日本においては廃墟の不在によって今と神話世界とは遊離している。それ故、ヨーロッパにはメランコリアがあり、日本にはアイロニーしかない。日本が自己を表現する事なしに常に外を参照しやす

い特質を持つのはそれ故である。がレクチャーの主旨。
　十年程前にやり始めていたバリ島のコスモロジーが近代化によって壊されてゆく過程の調査を思い出す。アレも中途で放り出してしまったが、良い視点だったんだ実ニ。しかもバリ島は遠かった。この方向の研究は私には出来なかった。建築作品で遠廻りに、そのような直観を表明しておく事位しか出来ないか、もう。
　海日汗のリポートが送られてきた。モンゴルのゲルのオリエンテーションについてのリポートである。ラップランドのコタで思い付いたことを彼女に調べてもらったのだが、遊牧民族のコスモロジーはそのオリエンテーション感覚に集約されている筈だと思っていた。これは海日汗の博士論文のテーマになるだろう。自分で出来ぬ事は弟子にやってもらうのが良いのか。残念だが。

三月二〇日
　第一講佐藤滋レクチャー。城下町の持つ近代的な意味から説き起こした。地政学的把握である。市民参加の計画的方法を次に事例を引きながら説いた。吉坂隆正の不連続の連続を思いおこさせるものがあった。アレキザンダーの仕事が建築では実を結ばずに、都市へと展開してゆこうとするのだなという事もその仕事振りから考えさせられた。早稲田の都市計画の可能性の一端を見た思いがする。
　第二講伊東豊雄。今現在考えている事を現実の時間の流れの中に身を任せて話してくれた。地歩を築いた自信がそうさせるのだろうが、むしろ新生伊東豊雄を感じた。この人は退行しない。五〇代を乗り切って新境地を切り開いている。ベルギーの仕事、ロンドンの仕事、私にはその価値が痛切にわかるんだなあ。この共感は何と呼べば良いのか。良い航海をと祈りたい。今日のレクチャーの印象はもう少しまとめて記録しておきたい。

三月二一日
　本格的な雨降り。二五日の大学の卒業式は帰れそうにないが、我家の屋上の菜園でファッション誌の撮影が行われる事になった。モデルがニューファッションを着て、その背景が我家の空中菜園というわけ。笑わせるネエ。
　このワークショップの展望に関して小刻みなプランを作らねば。中間講評会。シンポジウム。グライター氏ベルリンに帰る。このドイツ人との関係は大事にしたい。十九時ＯＢ会が楠会館で開かれる。こういう時の坊城君のあいさつは仲々のモノである。